

十五年戦争下、反ファシズムと

デモクラシーの確立を訴えて

言論統制とそれに萎縮したマスコミを

痛烈に批判した、幻の

反体制メディア評論紙、復刻!

現代新聞批判

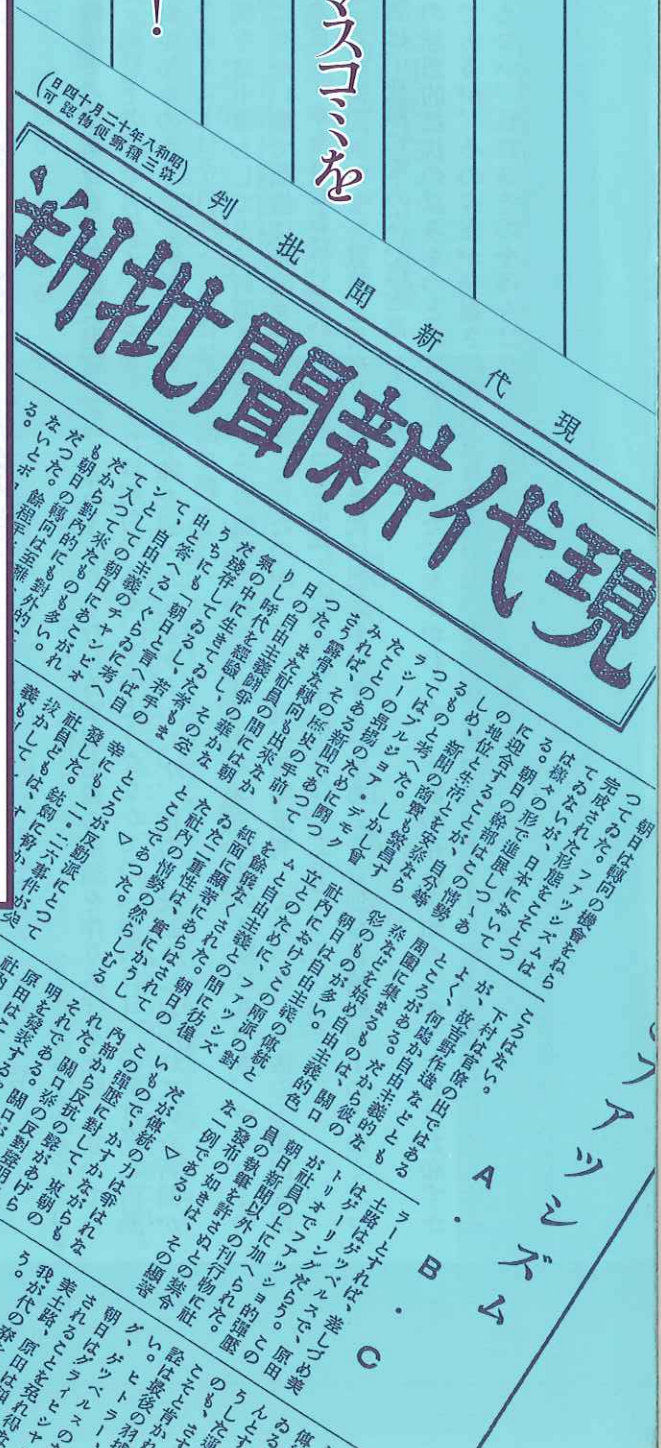
一九三三(昭和八)年一月〜四二年三月

全七巻・別冊一

本体揃価 一四〇、〇〇〇円

太田梶太 主筆 門奈直樹 監修

不二出版



反ファシズムの連帯を明らかにする資料

荒瀬 豊

批判という語は、第一次大戦から一九三〇年代にかけて、ことのほか厳しく根源的な思索を意味していた。I・カントの名著三部作『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』が紹介検討され、かたやK・マルクスからも『経済学批判』や『資本論』の本格紹介を通じて古典派の政治経済学批判が新しい学問実践の支柱だと教えられた。日本の思想家に例をとれば、長谷川如是閑の名著『現代国家批判』『現代社会批判』は二十世紀の政治社会構造をその根底から明らかにしようとする体系的な試論であった。

長谷川は『大阪朝日新聞』社会部長の席を追われて個人雑誌『我等』（のち『批判』と解題）を拠点としたのだったが、おなじ『大阪朝日』でより若い人脈をもった太田棍太の『現代新聞批判』にも、眼前の事実を系統づけて本質的な解明に迫る強靱なパネの持統がたくましい。しかも、太田が従事していた整理部という職域は、あらゆる分野の記事の正誤軽重をみきわめて紙面に配置するかなめの部署だっただけに、『現代新聞批判』の内容は、国際政治から風俗、芸能などにまで及んでいる。

寄稿の顔ぶれも、たとえば日本放送協会（のちNHK）の報道や文芸の基本路線を敷いた成沢玲川や、ノーベル賞受賞の平和思想家ノーマン・エンジェルなど、三十年代のたいじな思想家に富んでいる。反ファシズムの連帯を考えるうえで、確実に有力な資料が、門奈直樹氏の尽力により世によみがえった嬉しさは、たとえる言葉も無い。

（日本女子大学教授）

戦時下思想的抵抗の新発見

家永三郎

十五年戦争下、マスコミが時勢に追随して、というよりもむしろ軍国主義の風潮を作りあげる先頭に立っていたことは、戦時下のバックナンバーを通覧すれば明白である。そのようななかでの『福岡日日』の菊竹淳、『信濃毎日』の桐生悠々のように、時勢を批判する筆陣を張った記者があつたが、権力の統制下におかれていた新聞がその姿勢を貫くことは不可能で、抵抗は短期間で終わった。

菊竹・桐生は主筆として当該新聞を拠点としての抵抗であつたが、マスコミ内部の体験に基づき、マスコミの内部告発にちかい形で間接に時流を批判しようとしたのが、この『現代新聞批判』であつた。戦後の小和田次郎の『デスク日記』や今日なお続いている『マスコミ市民』の類の戦中版と見てよからう。

しかも、言論検閲制のない戦後と異なり、戦後世代に想像もつかないであろう苛烈な言論統制下のこのミニコミ紙の意義は、比較にならないほど高いものがある。

戦時下の思想的抵抗の試みをとめて収集してきたにもかかわらず、本紙の存在を知らなかったのはお恥ずかしい次第であるが、その存在が発掘され復刻されるにいたつたのは、私個人にとどまらず、学界のためにもよるこびにたえない。私自身その全体をはじめて通読できるのを、今からたのしみにしている。

（東京教育大学名誉教授）



太田棍太

貴重な情報を満載した

抵抗のジャーナリズム

尾崎秀樹

『現代新聞批判』は『大阪朝日新聞』出身の太田棍太が一九三三年から四三年へかけて一〇年刊行したマスコミ批判の半月刊紙である。△創刊の辞△にもあるように、「現代新聞批判は球代のジャーナリズムに厳正なる批判を加え、その純化と向上を図るために創刊された」のであり、よりマス・コミ化し、時代の趨勢に迎合していった新聞に対し、痛烈な批判をあげさせている。しかも当時の新聞報道では、うかがい知れなかつた各種の情報もあり、貴重な資料ともなっている。例えば『大阪毎日新聞』の城戸元亮会長退任の真相とか、『大毎』夕刊に連載され話題を呼んでいた林不忘の「丹下左膳」が突如中止となった事情、カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルグの墓がナチスに荒らされたというベルリンからの住谷悦治の記事、ヒトラーと単独会見した大毎特派員・黒田礼二の裏の事情、二・二六事件後の新聞反動化の危機、朝日を退社し内閣囑託となった尾崎秀実の転身の動機や心境を語る私信など、興味ある資料を提供してくれる。発行部数は五〇〇部に過ぎなかつたとはいえ、体制に抵抗した数少ないジャーナリズムだ。

（文芸評論家）



住谷悦治

『現代新聞批判』の復刻をよるこび

久野 収

言論、表現の自由は、国家と社会の健康度、良識の高低、強弱を計るバロメーターである。言論、表現の自由に鈍感な国家と社会、言論、表現の自由を指導し、統制できると信じこむ国家と社会は、確実に亡びの門をくぐっているのである。

一九三〇年代の日本は、政府も市民も、この明白な道理をはなから軽視していた。政府と官僚の方は、国論の戦争遂行への強制的方向づけに全力をつくし、そのため言論、表現の取締り、抑圧に熱心であつた。市民の方も、国論は上から決められるのが一番いいのだと信じ、少しの疑念も持たなかつた。

国論は、自由な言論とその表現にある討論を通じて形成されるべきだと信じたのは、ほんの一部の言論人と知識人たちにすぎなかつた。その人々は、関西では『現代新聞批判』『世界文化』『土曜日』に拠って、亡びの門をくぐる国家と社会に待ったをかけた。しかし政府と国論は、この試みを締め殺して、亡びの門を通っていった。

『現代新聞批判』の戦後五十年たつての復刻は、だれが正しく、だれがデタラメであつたかを明らかにしている。戦後の読者諸君の一読を心から期待したい。

（評論家）

復刻にあたって

本紙は、『大阪朝日新聞』出身のジャーナリスト・太田棍太が、十五年戦争のさなか、一九三三年に創刊したメディア批判のメディアである。太田は、『大阪朝日新聞』在職中、「満州事変」以後のマスメディアの状況に危機感を抱いて尾崎秀実・森恭三・鈴木東民らと社内新聞研究会を組織、会社と対立して退職した経歴を持つジャーナリストである。本紙の既成ジャーナリズム批判は痛烈で、軍部や言論統制に迎合する新聞のあり方を糾弾し、同時に新聞人への殺傷事件や舌禍事件などを見逃さない。また、新聞界での人脈を駆使して、新聞人批評・人事批判・誤報事件・校正ミスにいたるまで新聞社の内情すら明らかにしながらありとあらゆる新聞メディアに関わる事象に厳しい批評を行なっている。その対象は、大学新聞から地方新聞そして大新聞まで、幅広い。本紙には、ジャーナリストだけでなく、嵐寛寿郎・新村出・戸坂潤・小岩井浄・布施辰治・坂本勝など多彩な人々が寄稿している。なかでも出色なのは、同志社を追われた、太田の最大の協力者・住谷悦治による「学者転向物語」「大学教授華想物語」で、戦時下の知識人の思想の脆弱さを撃っている。住谷が欧州から、既成マスコミが決して報じなかったナチス体制下のドイツのメディア事情を詳しくまた迅速に紹介したことも貴重である。ファシズムが荒れ狂う時代にジャーナリスト主体の確立と勇気ある連帯を訴えて『世界文化』『土曜日』と同様、関西で体制に抵抗した数少ないジャーナリズムのひとつとして、これまで歴史に埋もれていた本紙を復刻するものである。

門奈直樹
不二出版編集部

現代新聞批判 創刊主旨書

現代は新聞の跳梁跋扈する時代である。大新聞は余りにも商品化し、往々にして自から權威を放擲してゐる。中小新聞は只管商品化せんとして、大衆に追随しつゝ、反つて大衆に侮られてゐる。然も、大衆は新聞に對して無力である。ある者は新聞を呪ひてこれに闘はず、ある者は新聞に媚びて及ばざらんことをこれ努む。あゝ、傲慢なるものよ、汝の名は新聞である。ただ、當世に大廣告主あり、嚴として新聞に對峙し、新聞は概ね大廣告主に阿諛して至らざらんことをこれ懼れてゐる。弱きものよ、汝の名もまた新聞では無かつたか。然し乍ら更に惟ふ。新聞の當代に跳躍して、國家社會に奉仕盡瘁しつある効果も亦大なるものがある。殊に所謂大新聞が、國家公共の力未だ成し得ざる所に率先着手して、善く文運の興隆普及につこめ、また國力の充足に資する所あるは、何人も認むるに吝ならざるものである。下名は多年、所謂大新聞の中に生きてつぶさにその功罪を知り、新聞の如何に商品化し、何故に弱きを求めるに至つたかの、苦衷と内情に精通してゐるこ、ひそかに自信してゐる者である。今、ここに、獨力現代新聞批判を創刊する所以のものは、實にこの自信を唯一の據る所として、敢て當代の新聞に尖鋭なる批判のメスを加へその賞揚禮讃すべき點を天下具眼の士に紹介し、而してまたその横暴不當を爬剔剔抉して呪咀する者と共に三斗の溜飲を下げんがためである。ここに、新聞の人事、經營の當否曲直については知り得る限りの情報を蒐集して、永久に紙面に表はれざる病根と情弊を白日の下に曝露して

創刊主旨書

復刻版『現代新聞批判』概要

全七巻・別冊一	第一回配本(第一〜三巻)	一九九五年六月
一九三三(昭和八)年一月〜一九四三(昭和一八)年三月	第二回配本(第四〜七巻・別冊)	一九九五年九月
A4判・上製・総二六七六ページ	推せん 荒瀬豊 家永三郎 尾崎秀樹 久野収	
別冊 解説・総目次・索引(別冊のみ分売可)	揃価 一四〇、〇〇〇円(第一回配本 六万円・第二回配本 八万円)	
監修・解説 門奈直樹(立教大学教授)		

●本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。弊社は注文制です。お近くの書店にご注文ください。

関連図書へ復刻版のご案内

他山の石

全四巻・別冊一

本誌は、当初は、欧米の著作物を翻訳・紹介して国際状況の中の日本の立場を明らかにすることにとめていたが、現実への危機意識から、次第に憲法を盾として議会政治と国民の自由回復をくりかえし主張し、軍部による政治の危険を訴え、反戦を唱えるようになる。度重なる弾圧、検閲にも挫けることなく抵抗し続けた、ひとりのジャーナリストの良心が脈打っている本誌一七三冊を復刻。

桐生悠々 主宰
一九三四(昭和九年)〜一九四一年
別冊||解説(荒瀬豊)・
総目次・索引
A4判・上製・函入・
総一、四九〇頁
揃価六〇、〇〇〇円



聖化

全二巻・別冊一

本誌は、群馬県甘楽(かんらく)教会の牧師・住谷天来が一九二七年に創刊、警察の命令によって廃刊を余儀なくされるまでの二年間、軍国主義の時代に刊行されたキリスト教雑誌である。批判的精神に満ちた人間尊重の思想に基づいて、日清戦争以来一貫して非戦を説いてきた天来独自の平和思想が結実した雑誌であり、『他山の石』『近きより』『嘉信』とならぶ反体制・反戦争の雑誌として貴重な資料である。

住谷天来 主宰
一九二七(昭和二年)〜一九三九年
別冊||解説(門奈直樹)・総目次・索引
B5判・上製・函入・総八三〇頁
揃価三六、〇〇〇円



古人今人

全一卷

本誌は当代きつての風刺家として知られる生方敏郎の個人雑誌である。軍国主義社会にあつても自由主義者としての気骨を失わずむしろユーモリストとしての真骨頂を発揮、軍部や戦時体制下の社会を痛烈に告発した。『他山の石』などとともに記憶されるべき数少ない抵抗の雑誌であり、当時の知識人たちの動向を知る上でも貴重な資料である。同じく生方の個人雑誌『ゆもりす』(一九二七年刊)も合わせて復刻。

生方敏郎 主宰
一九三五(昭和一〇)年〜一九四五年
解説(高橋新太郎)・総目次・索引付き
付||『ゆもりす』全2号
B5判・上製・函入・総五四二頁
本体価一八、〇〇〇円



不二出版

東京都文京区向丘一丁目二二番三三
TEL 03(3811)4433
FAX 03(3811)4464
振替 001601194084